掌編集
潜航花火

身代金

「それで、身代金は幾らにしようか？」
　小太りのメガネがそう聞くと、痩せっぽちの付け髭は間髪入れずに
「百億円」
　と、さも楽しげに答えた。
「馬鹿、そりゃ高すぎるだろ」
　リーダー格のマスクが付け髭を軽く小突く。小突かれた方の付け髭は暫く考えたのち、
「じゃあ値下げしようか。一千万で」
　身代金は大幅に値を落とされたが賢しげなマスクは
「一千万も払えるかね」
　と、いやらしい口調で言い、笑った。

　――僕が誘拐されてそろそろ一時間が経つ。
　三人の誘拐犯たちは犯行に興奮している様子で、この一室に監禁した僕をよそに犯行電話の内容を熱心に検討している。

「息子を誘拐したから、一千万円を払え」
「もうちょっと、テレビみたくならないのか？」
「じゃあ、どんなだよ？」
　思案に耽る彼等に僕はもどかしくなり、仕方ないなと助け舟を出す。
「お前の息子は預かった、帰して欲しくば一千万円用意しろ」
　僕のセリフに付け髭が手を打った。
「それだ、それで行こう！」
　さっそくメガネが僕の携帯をいじる。
「ちょっと待て、そのままの声で喋ったら俺たちだってバレるだろ」
　そう言ってマスクが付け髭を制止した。
「じゃあどうするの」
　困っている犯人ども。
　僕は苦笑いすると、よいしょとベッドの上に登り
「オ・マ・エ・ノ・息・子・ハ・ア・ズ・カッ・タ！」
　と宇宙人がしゃべるような素っ頓狂な奇声を上げた。
　犯人たちは顔を見合わるとゲラゲラと一斉に笑い出し
「一・千・万・円・ヨ・ウ・イ・シ・ロ！」
　と合唱した。

　準備が万端整うと、マスクの合図でメガネが僕の携帯のボタンを押す。
　すると一階の台所の電話が鳴り、母が受話器を取った。
　メガネは先程の文句を、僕がやってみせた金切声で再現する。
「あらま、そりゃ大変」

　と下から母の声。
「でも、幾らなんでも一千万は高過ぎるわねぇ」
　犯人達はざわめいた。
「じゃあ百万円！」
「高い」
「十万円？」
「まだまだ」
「じゃあ一万円？　ＤＳより安いよ！」
「ううん、それでもねえ……」
「ええ！？　オイちゃんいったい幾らなの？」
　喜ぶべきか、悲しむべきか。一度は百億円と値付けされた僕の金額は今や携帯ゲーム機以下だ。

「じゃあ、幾らなら払うの？」
　こじれる取引に弱気を見せ始めた犯人たちを前に、母の交渉術が冴え渡る。
「そうね、今晩あんたたち何が食べたい？」
「ハンバーグ！」
「唐揚げはどう？」
「好き！」
「じゃあ唐揚げ、作ってあげるからそろそろ降りてきなさい」
「えー……どうする？」
　顔を見合わせる三人。
「あ、そうだ。ご飯のあとみんなで花火やろうか？」
「やるやる！」

　――こうして、僕は誘拐ごっこに興じる兄の子供三人から無事解放されたのだった。
　小学生の甥たちは、約束通りに支払われた唐揚げを満足げに頬張りながら、誘拐の文句を例の宇宙人の奇声で大合唱。どうやら気に入ったらしい。
「オ・マ・エ・ノ・息・子・ハ・ア・ズ・カ・ッ・タ！」
「一・千・万・円・ヨ・ウ・イ・シ・ロ！」
　花火を買って帰った兄が「なんだそりゃ」と怪訝な顔をした。
「オイちゃん誘拐したらね、唐揚げになったの」
　経過を飛ばしすぎて説明になっていない返答に「はぁ？」と兄は苦笑いする。
「そうすると、これはお前の肉ってことか？」
　兄が唐揚げを指差し僕に聞く。自分の大好物でもある身代金を齧り付いて僕は笑った。
「よく味わって食べてくれよ」

＜終＞

タイムカプセル

　中学生だったあの時、そこに何を埋めたのか僕はすっかり忘れてしまった。当時遊んだモデルガンとか寄せ書きとか、そういった物を埋めたのだろうか。
　みんなは十年前にタイムカプセルを埋めた時、何を思っただろう。今じゃ何も思い出せない僕にはそれが気がかりだ。

　駅前のスターバックスで祐樹と幸一と待ち合わせて、それから少し遅れてきた崇の車に乗って郊外の公園に向かった。中学生時代毎日のように遊んだ公園だ。そこに僕達はタイムカプセルを埋めていた。
　僕達がこうして数年ぶりに再会したのは、そのタイムカプセルを埋めた公園が来年整地されて公的施設が建設されることを設計事務所で働いている祐樹によって知らされたからだ。一度工事が始まってしまえば二度と回収できなくなるかもしれない。
　祐樹は勤めている会社で部下を使う立場になってストレスが増えたと言う。幸一はずっとフリーターだったが去年から父親がやっている会社に入って修行中だそうだ。崇は十八歳で結婚して、今では子供が二人いる。上の子供はもうすぐ小学生になるらしい。
　暫く見ない間にみんなそれぞれ大人になっていて、なんだか僕だけ置いて行かれるような寂しさを感じた。

　夜が更けてきた。皆それぞれ仕事で忙しい事もあって昼間に集合できないのも仕方ない。暗がりの中、懐中電灯を手に祐樹が先頭になって公園の敷地内にある雑木林を進んでゆく。僕たちはシャベルやリュックサックを抱えてそれに続く。中学校で仲が良かった僕たちのグループは何をやるにもいつも裕樹が率先していた。数年ぶりに再会してもやっぱりそれは変わらないようだ。

「ここらへんじゃないか？」
「いや、もっと奥の方だろ」
「もう十年も前の事なんだ、少しは景色も変わってるだろう」
「目印くらいつけときゃよかったな」

　大体いつ回収するのかも決めてなかったような代物だ。目印をつけるなんて、そんな事は最初から考えていなかった。
　手がかりを探そうとあたりをグルグル歩いていた幸一が何かに気付いたようだ。

「なあ、この木じゃなかったっけ？　このＶ字の傷あの時もあったよな」
「確かそうだ。じゃあこの木がそれだったら……」

　崇が走った。そして幸一の立つ木の傍から３ｍほど離れた窪地にシャベルを立てた。

「ここだ、ここだよ」
「ナイス。助かったよ」

皆でそれぞれシャベルを振るって掘り進めて行く。土は柔らかく感じた。間違いなくここにタイムカプセルが埋められている。
掘り進めて行くごとに皆の息は荒くなってゆく。そのうち、１ｍは掘っただろうか、裕樹のシャベルがガチンと硬い音をたてた。皆息が上がっていた。ぜいぜいと苦しげに喘ぎながら崇が
「あった」
と、うめくように言った。
「良かった……」
幸一がぺたんとその場に座り込んだ。
祐樹はまだシャベルを手に慎重に掘り進めてゆく。ゆっくりと、まるで埋められたものが壊れるのを恐れるように丁寧に。
そしてタイムカプセルの全貌が明らかになった。裕樹はぽつりと洩らした。

「……智之」

急に名前を呼ばれて僕は振り返った。裕樹が手を付いて泣いていた。どうしたんだ裕樹？
崇も、幸一も泣いている。

「ごめんな智之。こんな姿にさせちまって。ごめんな」

ぽろぽろと涙をこぼす裕樹たちの前には土に半分埋もれた一体の白骨死体があった。
そうか、僕がタイムカプセルだと思い込んでいたものはこれだったのか。
その白骨死体は僕だった。

十年前のあの日、僕はいつものようにこの公園で裕樹たちと遊んでいた。ふざけあってるうちにプロレスごっこになった。秋も深まったその頃、雑木林には落葉が厚く積もってまるでクッションのように柔らかかった。祐樹は僕を担いでへんてこなバックドロップを決めた。皆知らなかった。落葉に隠れたそこには小さな切り株があった事を。
僕は切り株で首を折って死んだ。
高校受験を控えていた彼等は大人に言い出せないまま僕をその場に深く埋めた。

彼等は僕の骨を大事そうに布袋に包むと車を出した。次はおそらく人目の付かない山奥あたりに僕を埋めるのだろう。

タイムカプセルは僕だった。忌まわしい過去を詰めたタイムカプセル。
そして次は二度と開封されないタイムカプセルになるのだ。

祐樹たち三人はこれまでずっと後悔と罪悪感に苦しんできたようだ。
しかし学生から社会人になりそれぞれ家庭や社会的な立場を得た彼等にはもう過去の罪を告白する事はできなかった。
そして今日、僕を掘り起こしてまた別の場所に埋めなおす彼等は殺人を犯した過去と再び対面し、よりその罪悪感を深めた。彼等は僕を殺した過去を引き摺ってこれからも生きてゆくのだ

。

　車の中では誰も何も言わない。ただ時々すすり泣くような声が聴こえるだけだ。僕は彼等が可哀想になった。
　あんまり可哀想だから僕はこれからもずっと彼等と一緒にいてあげようと思う。
　友達だからね。

＜終＞

コンビニシンガー愛華

　彼女は一体何者なのか？
　一説によると、十数年前に国民を瞬く間に魅了したアイドル歌手の後の姿だという。しかし彼女については幾多の謎が付き纏う。
　その場の即興で瞬く間に歌詞を作成する並々ならぬ手腕。瞬時にバックバンドを指揮し、神出鬼没のライブを行うその実行力。
　そして特異なのは、何気ない風景に突如として豪華な特設ステージが出現するという幻想的とも言える現象。
　更に奇妙なのが彼女の歌声は常に街行く一般の男女に向けられていて、ギャランティが発生するような一般的な営業などを行っている等という話を一切聞かない事である。

　「コンビニシンガー愛華」
　彼女のステージを目撃した者は、彼女のことを皆親しみと敬慕を込めてこう呼んだ。
　コンビニエンスストアのように二十四時間休みなく時や場所を問わず出没し、その歌声で聴くもの皆をほっとした幸せな気分にさせることからそう名づけられたそうである。

　私が収集した彼女の目撃談は、殆ど都市伝説の様相を呈している。
　街中の公園にある公衆トイレに駆け込んだ一人の男性が用を済ませたのち、備え付きのトイレットペーパーが切れていたという悲しい事実に気付き、思案した挙句絶望に似た気持ちでその足に着用していた靴下を使おうとした、
　その時。
　公衆トイレが男の個室を除き真っ二つに割れ、きらびやかな衣装に身を包んだ彼女が出現したというのだ。
　彼女は切々たる歌声でブルース『紙がない』を唄った。そのちぎれんばかりに悲哀に満ちた歌声は公園の前を行き交う人々を瞬時に虜にした。
『紙がない　ああ紙がない　のこされた靴下と私　泣かないでミスタージュンコ』
　周囲の人々は震えんばかりに涙を流し、誰もが持っているポケットティッシュを公衆トイレに投げ込んだ。
　男はポケットティッシュの山に埋もれながら最悪の困難を脱したという。

「ありがとう、ありがとう皆さん。また逢う日まで、ごきげんよう」
　聴衆に向かってそう言い、愛華はゆるやかに手を振り熱狂さめやらぬステージを去った。真っ二つに割れた公衆トイレは元どおりに戻り、バックバンドのメンバー達も粛々と退場したらしい。

　こうして彼女はいたるところに出没してはその歌声で人々を救い続けてきた。
　ケンカ別れ寸前のカップルの足下から登場した時は、驚愕するカップルの肩を抱きながら『嗚呼、ダメなの愛しすぎて』をパワフルに唄うとカップルの両目からは滂沱の如く涙が溢れ、互いに過去を謝罪し結婚の約束をしたと言う。
　愛華は彼等のために続けて『結婚おめでとうあなたたち～百年の愛を願って～』を唄い、熱狂

する周囲の人々と共に彼等の新しい門出を祝福したそうだ。

　コンビニシンガー愛華とは何者なのだろうか。
　穿った見方をすれば、これは彼女と彼女が所属するレコード会社の一大宣伝活動であり、この後彼女は大々的なデビューを果たすのかもしれない。確かにステージの仕掛けは一々大掛かりだし、伝聞によると衣装のひとつひとつもロハの仕事とは到底思えない程の豪華絢爛ぶりだと言う。
　しかし彼女の噂が街中で聴こえるようになって一年、彼女に存在に対してメディアは未だに沈黙を守ったままである。
　私はこうして彼女についての噂を追ってはいるが、しかし一度も彼女の歌声を聴いたことがない。歌声ばかりは人からの噂では決して感じ取れない。
「一体、どんな歌声なんだろう」
　ラップトップのモニターに私がそう漏らした、その瞬間！
　私の部屋のリビングが真っ二つに割れ、幾つものライトが目もくらむばかりに照らされた。どこから涌いたのか不明なバックバンドが演奏をはじめ、そしてその真っ白なステージの中央には彼女が、コンビニシンガー愛華がいた。
　なんという華麗な衣装、そしてこの晴れ晴れとした表情。部屋一帯に超大物歌手のオーラが漂う。私は思わず息をのんだ。
「呼んでくれてありがとう。あなたのお仕事も大変ね。じゃあさっそく、一曲聴いてちょうだい」
　呼んでませんよ、などといった無粋なツッコミを入れる隙もなく、彼女は朗々と『生涯無名～コンビニシンガー愛華はあなたたちのもの～』を唄い始めた。清涼かつクリアでありながら迫力のある歌声が優美なメロディとともにステージから流れ私の鼓膜を、そして身体を満たした。
　一体この部屋はどうなってしまったんだろう、後でちゃんと元に戻してくれるのだろうか？
　そんなつまらない心配は彼女の歌の前に綺麗に霧散してしまっていた。
　なんて素晴らしい曲、そしてなんて素晴らしい声なんだろう。私は自分の歳もわきまえず子供のように泣いていた。

＜終＞

赤い糸

　これは私の友人であるＹから聞いた話です。

　連日の熱帯夜でかなり蒸し暑い夜でした。
　その日もＹはアルバイトを終え、コンビニに寄って弁当とアイスクリームを買って家路に就いていました。
　Ｙの住む家は閑静な住宅地にあって、夜になると通りがかる人は誰もいません。Ｙはコンビニのビニール袋に入ったアイスクリームを頬にあてながら静かな舗道を歩いていました。

　「あの、すいません」
　突然声をかけられてＹは驚き、立ち止まりました。振り返るとそこには二十歳前後と思われるショートカットの可愛い女性が立っていました。
　「あのー、首元に……赤い糸くずが」
　自分の首を指差し女性は言いました。夜も深くに突然声をかけられたとはいえ若い女性の親切です、Ｙは丁寧にお礼を言って自分の首元を手で払いました。しかし女性の言う赤い糸くずなどどこにもありません。
　「えっと、そこじゃなくて、もうちょっと右……」
　女性はＹの首元を指差して教えてくれますが、なかなかＹはその赤い糸くずを取ることができませんでした。
　「わたしが取ってあげますよ」
　もたついているＹに女性が近づいて指を伸ばしてきました。それをＹはされるがままにすることにしました。これが新しい恋の始まりになるかも、なんて事を思いながら。
　「あれえ。おかしいなあ、取れない……」
　Ｙの首元に指を這わせた女性でしたがなかなかその赤い糸くずというのを取ることができないようでした。
　「いや、もういいですよ。家帰ってから取りますから」
　Ｙはそう言いながら内心で上手いお礼の返し方を考えていたようです。
　ところが、
　「いいえ！　あとちょっとなんですよ」
　女性は頑として赤い糸を取ろうとするのをやめようとしません。Ｙは初めてこの女性に異常な感じを持ったと言います。
　そのとき、Ｙの首元に鋭い痛みが走りました。女性は爪をたててＹの首の肉を抉っているのです。女性の指にあしらっていた長い付け爪がパキパキと音をたて、深々とＹの頚動脈あたりに食い込んでいました。すぐに血が滲み、Ｙのシャツを赤く染め始めました。Ｙは悲鳴を上げ、女性を押しのけようとしましたが、その華奢な外見とは違い彼女の体はビクともしません。
　「ちょっとじっとしててくださいねー、あとちょっとですから！」
　女性はＹを路面に押し倒すと、じぐじぐとＹの首をほじりはじめました。やがてYの頚動脈が破れ、血が噴水のように噴き出てきました。
　Ｙは最後に女性の顔を見ました。整った、少し幼い顔立ちににこやかな笑顔、そしてその首元には大きな傷跡。

Ｙの意識は糸が切れたように途絶えました。最後に、
「とれた」
と、満足そうにつぶやく女性の声を聴いたそうです。

……以上が私が聞いた話です。

え、おかしい？
はあ。死んでしまったＹから私が話を聞ける訳がない、と。
それがねえ、Ｙは死んではいないんですよ。彼は生きていたんです。
Ｙが目を覚ましたときには、その女性の姿も夥しい血などもなくて、Ｙは路上に寝転がっていたそうです。首元に大きな傷跡が残っていましたが。
私はＹからその話を聞いたのですが、話をしている間Ｙはずっと私の首元を見ていました。
「赤い糸くずがついている」と言ってね。
そのうち彼はその糸くずを取ってやるからとピンセットを取り出して私の首をつまみ始めました。
「いいよ、自分でやるから」
そう私は言ったのですが、彼は「いいから、いいから」と執拗に私の首についているという赤い糸を取ろうとしました。
そのうちＹの腕に力が入りピンセットは私の首を傷つけ血がしたたり、着ていたシャツの襟が赤く染まりました。
痛みと流血に驚いて暴れる私を
「もうちょっとで取れるから大人しくしろ」
そうささやくように言いながら彼はピンセットを深々と突き入れました。そしてそれを抜き取ると爪で私の首の傷跡を掻き毟り始めました。
物凄い量の血が流れ出て私の意識は薄れていきました。その最後に、
「とれた」
というＹの満足げな声を聴きました。

……ええと、この話は怪談になりますでしょうか？
あまり怖くはないと思いますが、自分としては結構面白いと思います。

……。
やっぱりダメだ！
ちょっと良いですか？　さっきからどうも気になっていけない。あなたの首元に赤い糸くずが付いているんですよ。それがどうにも目に付いて仕方がないんです。
それ、私が取ってあげますよ。いえいえ、良いんです。さあ、動かないで。
都合がいいことに私いま電気ドリル持っているんです。これでちょちょいっとほじくり出して

あげますから！

＜終＞

ポップ・オフ

　今、一部の喫煙家の間で『ポップオフ』と呼ばれる煙草が愛好されている。
　俗に「ポックリたばこ」と呼ばれるこの煙草は、これを知る愛煙家の話によると一般に喫煙が原因で発症するとされる肺がんや肺気腫、心筋梗塞、脳卒中などを含むすべての疾病には全く罹らない代わり、決められた年数で突然死するという。
　この「ポップ・オフ」の箱にタール・ニコチン値と併記されているＰ値がポップ・オフ喫煙者の残り寿命であり、10Ｐならばポップオフを喫煙して十年で、1Ｐの場合一年で突然死、つまりポックリ逝く（pop-off）という話である。

　しかしポップオフの販売元であるアメリカ・ミズーリ州はセントルイス市に本社を置くエバンゼル・タバコ社は、噂されるこのＰ値の奇跡的な効果についてのインタビューに以下の通り回答した。
「ポップオフは風味の違いはあれど品質的には他社製品となんら代わることのない一般的なたばこであり、噂の根幹となっているＰ値はあくまでも開発側の ジョークである。実際 ポップオフが原因で突然死したという事実は一切なく、また喫煙による弊害がないなどの報告も届いていない。これらは全く根拠のない都市伝説であり、噂に尾鰭が付いた類の話に過ぎない」
　事実、死亡したポップオフ喫煙者の遺族が起こしたエバンゼル・タバコ社への損害賠償訴訟では、喫煙者の死因とポップオフとの因果関係が明らかでないとして一審で棄却されている。

　ポップオフ喫煙者の声

　二十三歳男性
「5Ｐのポッポ（ポップオフの愛称）をもう五年吸っていますが、体調の変化なんて何もありません。噂のＰ値ですが十代の頃は早死にしても構うもんかと友達 と一緒にこの煙草を吸い始めましたが、今は単に風味の良さで愛好しています。友人ですか？　確かに友人の一人が先月亡くなりましたが、事故死でした。この 煙草とは無関係ですよ」

　三十二歳男性
「去年から50Ｐのポップオフを吸い始めました。本当に五十年健康に過ごせるなんて事は信じてはいませんが、まあ一つの験かつぎみたいなものですね。味も良いですし、これからも吸い続けるつもりです」

　十八歳女性
「こんなものバカな噂じゃんって思ってたけど、昨日ポッポの1Ｐ吸ってた彼氏が死んじゃったの。あたしも1Ｐ吸っちゃってて……」

　二十九歳女性
「寿命が決められる、なんてくだらない噂話だと信じていましたが、二年前に以前から三十歳で死ぬと公言していた主人が本当に三十歳でぽっくりと逝ってしまって。私は煙草を一切吸わない

のですが主人と暮らして受動喫煙をしていると思います。私は一体どうなるんでしょう」

　六十二歳男性
「私は重度のＣＯＰＤ（慢性閉塞性肺疾患）患者で酸素の供給が必要不可欠な身体でしたが、20Ｐのポップオフを吸い始めたところ症状も徐々に改善して家 族 ともども喜んでいます。今まで色々な病気にかかって苦しんで来ましたが、この煙草のお陰で病気と無縁の穏やかな老後を送れそうです」

　ポップオフは昇天する天使のデザインのタール13mg　ニコチン1mg
　1P・5P・10P・20P・50Pと各メンソールタイプの全十種類。
　――都市伝説が産んだ呪いの煙草か、それとも健康を約束された天使の煙草か、ポップオフは外国たばことして一部の自動販売機、たばこ店等で現在も販売中である。

＜終＞

山鳥を産む女

　備中成羽の百姓与六は、齢二十を越えた年に隣村から嫁を迎えることとなった。
　貧家に生まれ長じ、器量の良い娘など望むべくもなかった与六であったが、彼に嫁いできたのは思いもかけず見目の良い、美しい娘おとよであった。これに喜んだ与六は気持ちよくおとよを迎え入れ、二人は晴れて夫婦となり共に暮らすこととなった。

　しかし暫くの暮らしのうちに与六はおとよを不審に思いはじめた。
　このおとよは少しも与六と口をきこうとしないのである。
　唖ではないのは分かっていた。祝言の折には確かに声を聞いたのだ。だが何故かおとよは祝言以来与六へ言葉を発することがなかった。
　与六は、おとよが自分を嫌っているからだと思った。嫌いで嫌いで嫌い抜いていて、口すら聞きたくないのだと。器量が良く、またよく働くおとよではあった が、心を開こうとしない嫁に寛容でいられる与六ではなかった。次第に与六はおとよを疎みはじめた。手こそ上げはしなかったがおとよの暗い顔を見ては強く罵るようになった。

　しかし口を聞かない事を除きさえすれば、おとよは働き者の良い嫁である。与六はおとよを実家に戻すこともなくその後も家に置き続けた。それでいながら、おとよの悲しげな顔をみつけては与六は苛苛と声をあげ責め立てた。
「おまえがおれを嫌いなのはよおく分かっている、だが嫌いなら嫌いなりの言葉があるものだろう。うんとかすんとか言うてみよ」
　与六は叫んだが、それにもおとよは苦しげに顔をゆがめるだけであった。

　おとよが与六の家に嫁いで半年が過ぎた。おとよは相変わらず与六に対して口をきこうとはしなかった。この頃になると与六のおとよへの罵りにはあきらかな悲しみの色があった。それに耐えるおとよの表情もまたふかく曇っていた。二人のくらしは辛く、暗いものだった。
　ある日、与六は耐えかねて言い捨てた。
「おまえのだんまり顔など、もううんざりじゃ。大嫌いなおれの元など出て、どこへなりと去んでしまえ」
　血を吐くような与六の言葉にもやはりおとよは何も答える事はなかった。与六の目には涙がにじんだ。そのとき、

　ぼたり。

　と、何かが重たく落ちた音がした。与六がおとよを見る。おとよの裾のした、足の間に血にまみれた鳥がうごめいていた。雛にしては大きい山鳥であった。
　山鳥はふるふると震えると嘴をおおきく開き、驚いたことに

「しにたい」

　と鳴いた。

　ひっ、と俄かにに恐怖した与六は戸の支えにしていた木切れを取り出すとたちまちに山鳥をたたき殺した。おとよはその様子をみると静かに涙をこぼした。

　このような事があっても与六はおとよを追い出すことはなかった。しかしおとよはそれ以来与六の責め句をうけるたび、
　ぼたり。
　と、あの血まみれの山鳥を産むようになった。山鳥はやはり、
「しにたい」
　と鳴いた。そのたび与六は木切れを持ち出し、すかさずたたき殺した。
　おとよは死んだ山鳥を悲しそうに抱いては墓をつくり続けた。ひとつふたつ、みっつよっつ、いつつむつ。そのうち山鳥の墓は十を数えた。おとよは益々表情を暗くし、また与六もこの異形なる嫁にほとほと疲れはてた。

　ある時おとよはまた山鳥をぼたりと産み、与六はまたいつものように木切れでたたき殺そうとした。
　しかしその時鳴いた山鳥の声に木切れを持つ与六の手がとまった。
「与六どの。おめえさま」
　与六の名を呼んだ声は、祝言のときに確かに聞いたおとよの声そのものだったのだ。
「おとよか」
　与六はおとよを見た。悲しげな目をしておとよもまた与六を見た。
「これは、この鳥は、おまえの声であったのか」
　血まみれの山鳥を抱き上げておとよは小さく頷いた。
「嫌ってなどおりませぬ。おめえさまを嫌いなど、こればかしも思ってはおりませぬ」
　山鳥はふるふると震えながら鳴いた。
「ただ、どうしても、おめえさまの前では声が出せなかったのです。嫌ってなどいない、そう言いたかった。でも、言葉など唇からすべり出てしまえばそれはも う、私の心とは違うもの。嘘に変わってしまうのです。わたしはそれがこわかった。わたしはわたしの内の声をずっとずっとそのまま、大事に置いておきたかっ たのです」
　おとよの声を鳴く山鳥を、おとよはわが子を慈しむように胸に抱き上げた。
「おめえさまにはわたしが嫌っていると思われて、それでも本心は打ち明けられず。わたしは毎日がくるしかった。だからいつも思っていたのです。しにたい、と。それを毎日毎日思っているうち、声が鳥になって産まれ落ちました」
　山鳥は羽をひろげて飛び上がると、おとよの肩にとまった。
「この声はわたしのせいいっぱい。もう山鳥もこれで最後です。たたき殺すのも縁を切るのもおまえさまにお任せします。それでも、これだけは言わせてください」
　与六は棒切れのように立ち尽くしたまま山鳥の声を聞いていた。
「はじめて顔を会わせたときから、与六どのに惚れておりました。これがわたしの本心です」
　山鳥は羽をしばたたかせ与六の前に舞い降りた。与六の手にあった木切れがゴトリと落ちた。
　与六の様子を見ていた山鳥は納得したかのように与六の小屋から飛んでいき、やがて見えなくなった。
　おとよは膝から崩れ落ち泣いた。与六の目にもやがて涙があふれた。ふたりは黙ってままで泣き続けた。

――それからの事。
山鳥の姿を借りた心の声によっておとよの本心を聞かされた与六は、以後おとよを大事に扱うようになり、おとよにも暗い表情が宿ることがなくなった。おと よは相変わらず度を越した寡黙ではあったが、与六は満足だった。それ以来おとよが山鳥を産むことはもう二度となかったという。

後書
備中成羽にはおとよが産んだとされる十羽の山鳥の墓が現在（元文二年）でも確認できるとのこと。
殺した山鳥への罪ほろぼしか、与六はこの墓を毎日参っては大事に世話をしたらしい。こののち与六おとよ夫婦は二子をなし、貧しいながらも一家仲睦まじく暮らしたそうである。

土屋清左衛門異形聞書より

＜終＞

虫の知らせの虫

　あんた、ちょっと聞いてくれよ。
俺たちの業界にも守秘義務という奴が厳然としてあってね、
基本的に入手した秘密を部外者に喋ることは許されないんだ。
　んだけども、俺はできの悪い部類に入る業界人なんで
聴いてしまった他人の秘密ってのは、どうしても、
自分の胸三寸に押さえとく事ができねえんだ。
　同僚には「虫の好かない奴だ」なんてよく言われるけど、
こればっかりはサガって奴で自分にもどうしようもねえんだよな。
　だから俺は今日も飛び回ってた訳よ。

「長岡さんの親父さんが危篤らしい」
　それを全く何の関係もない徳田さんの息子に知らせてやったりさ、
「木町さんの奥さんが妊娠した」
　ってな事を、やっぱり何の関係もない宮瀬さんの耳に入れたりね。

　まあ結局、そんな知らせ聞かされたその人達にはまったく何の実りもないんだが、
俺自身はすっきりするからいいんだよ。
　他人の秘密なんて、そうそう抱えきれるもんじゃないからな。
　そうやってさ、俺は守秘義務を破りまくって今日も飛び回ったよ。

　でもさあ、たまあに勘違いする奴がいてよ、
「超能力者登場！」とかなんとか言って、テレビに出演する馬鹿者がいるんだわ。
　お前なんか何回か俺が他人の知らせ漏らしただけじゃんって。
「次のワールドカップでは日本は大躍進します」とか俺一言もそんな事言ってねえし。
何したり顔でヨタこいてんだと。おかげで上司に釘刺されたじゃねえか馬鹿野郎め。

　しかし……なんだね。昔はよかったね。
鬼とか妖怪とか、祟りとかバチとか、それに言霊とかが信じられてた時代さ。
　その頃は俺たちも相応のリスペクトって奴を払われてたわけよ。
　でも今じゃ何でもかんでも科学が進んじまって、せっかく俺たちが額に汗して働いても
何ひとつリスペクトされねえでやんの。
　それどころか俺たちの全存在スルーじゃねえか。
　せっかく良いこと教えてやっても、「あ、それって虫のしらせね」って、
言うは言うけどよ、お前それおもっくそ慣用句になってんじゃねえかって。

　そんなこんなで、まったくやっててやりがいのない仕事なのよ。
それどころか俺たちの労働環境は年々危険になってきやがるのよ。
　同僚の北方はゴキジェット吹きかけられて今も咳がとまらねえ、
内藤なんかは蚊と間違われて危うく新聞紙で叩き潰されるとこだったんだわ。

虫の息で俺に言うのよ。
「お、おばあちゃんが　か、階段から……」
　ってよ。俺に言われても困るけどさ。

　そんな訳でさ、俺この仕事にあんまり、モチベーションての？　湧かないんだよねえ。
　だからって辞めるわけにはいかないしさ。
あんたも人間辞めようと思っても簡単にはいかないっしょ？
　お互いつらいわなあ　まあ飲みない。

　でも、あんた俺の愚痴よく最後まで聞いてくれたね。
あんたはい人だよ、ささ、もう一杯飲みない。
いやいや、ここは俺のおごりだから！
いいから飲みない、飲みない。

　あ、そうだ！
今日は仕事抜きだ。今日だけ特別に、あんたに良い事教えてやろう。
あんたの彼女浮気してるよ。

＜終＞

光平

　今日の仕事が終わり夫にメールを打とうとすると、いつもの様に光平がしゃしゃり出てきた。
「だれにメール？」
　二ヶ月前から私の携帯に住み着いている八歳の男の子は、私の連絡先にいつも興味津々だ。
「旦那」
「何番目の？」
「旦那は一人です」
　冗談を私が軽くあしらっている内に、光平は新規メールの作成画面を出している。携帯の中での光平の勝手ぶりにもすっかり慣れてしまった。メールを読まれてもさして気にならないし、子供に聴かれては困るような艶のあるやりとりは夫とも久しくしていない。
　二ヶ月前私の携帯に光平が現れた時、私は彼の存在をてっきり新種のアプリだと思い込んでいた。しかし彼の言葉にはプログラムされた電気くささなどは一切なく、すぐに私は光平が本物の人間の子供なのではないかと疑いを持ち始めた。私は光平に彼が私の携帯に住むに至った経緯を聞いたが、彼の答えは「家族の元を自分から家出して、パソコンの画面に飛び込んでネットの河のような流れに乗ってスイスイ遠くまで泳いでいった。気が付いたときには私の携帯に流れ着いていた」というものだった。私はさすがにこの突飛過ぎる話を真に受ける事はなかった。しかしアプリケーションなのか人間なのか依然曖昧なままの存在である光平を、私は夫にも秘密の同居人として受け入れる事にした。そうして二ヶ月が過ぎた。

　列車の席で夫に帰宅する旨のメールを打っていると光平が語尾にごてごてとした大きなハートを載せてくる。
「そこ、ハートいらない」
　そう言うと、
「どうして？　ケッコンしてるんでしょ」
　と、分からないのか分からないフリをしているのか、液晶の隅で光平は不思議そうな顔をする。
「ハートとか、そういうのは卒業したの」
「へえ、卒業とかあるんだぁ？」
　改めてそう聞かれてみると自分が間違っているような気もしてくる。
「きみも大人になったら分かるから」
　これは反則だなと思いながら私は携帯を畳んだ。光平は「ふうん」と言うとそれきり黙り込んでしまった。

「お前、何かあったの？」
　家に帰ると先に帰宅していた夫が半笑いで聞いてきた。手には携帯。
「浮気でもしてるのかと思ったけど、『帰る』って書いてるからさ」
　夫の携帯を奪い見てみるとさっき送った私からのメール。
　『今から帰ります』の後に、あのごてごてのハートが五つもくっついている。
「なんか、こういうの懐かしいよな」

自分で見せて来た癖に夫は珍しく照れ笑いしている。
私も笑って自分の携帯を指でぱちんと弾いた。「いてっ」という子供の声を夫は聴いただろうか。

――その夜、私は夫と一緒に光平の家を探し、冒険する夢を見た。

＜終＞

線香花火

　気付いたらもう太陽はすっかり沈んでしまって、和室の続き間から覗く庭のどこかから気の早い虫の鳴き声が聴こえる。

　親戚連中は用意した料理と酒が片付いてしまう前に粗方帰ってしまっていた。六畳の続き間に跨いで置かれた長テーブルを邪魔臭そうに蹴って、酔っ払った下の弟が大の字で寝ている。上の弟は下戸という体質を利用され、タクシー代わりに親戚たちの送迎に使われている。弟らの女房たちは宴の後始末に忙しく、郁子と一緒に台所を動き回っている。郁子はもう今年で二十八になる筈だが、まだ嫁の貰い手がない。しっかりした良い娘だが、ちと負けん気が強い所が玉に瑕だ。そんな事を思っていたら郁子がこっちへ振り返った。あぶないあぶない。

　台所を離れて縁側の外の庭へ降りると、妻が座り込んで花火をやっていた。あの花火セットは諒太に買ってやった残りだ。諒太も暫くはこの家にいたのだが、随分むずかりがひどく孝也が連れて帰ってしまった。孝也の奴、親になってみると親父やお袋の苦労が分かるよ、などと嘯いていた。新米も甚だしい父親だが妻子を抱えたこれからが奴の人生の正念場だろう。

「お父さん、コオロギ鳴いてますね」
　妻の静かな声で我に返った。妻は線香花火に火を付けている。
　そうだな、夏も盛りだなんて思っているうちに秋の奴がもうそこまでやって来ているよ。そう言うと
「お父さんコオロギ嫌いだから。男の癖に」
　と微笑み、そして俯いた。
「線香花火好きだったよね」
　ああ、昔っから派手な花火は郁子と孝也に全部取られちまってたからね。
　そう答えたが妻に返事はなく、彼女は線香花火の咲いては消える小さな光の花束をぼんやりと見つめていた。
　その姿がまるで全然知らない人のようで、俺はやはり不安になっ てしまった。
　丸めた妻の背は思いの外小さく、その隣に腰を下ろし肩を抱いて「大丈夫、大丈夫」と背中を撫でていると、彼女の背は次第に温かくなり、そして励ましている筈の俺の方がなぜかとても楽になってゆくのを感じた。

　――父の初盆は終わった。
　家の中に盆提灯が飾られるのは初めての事で、その水色と桃色のぼんやりとした不思議な明かりが家の中を幻想的な色合いに染めると、なんだか私の現実感までが遠くなる気がしてしまう。
　さっきから泣きそうな顔で一人花火をしていた母が今は一人でいるように思えないのは、

　そうではなくて、家族みんなが、ほのかに暖かく包まれているような、背中をやさしく撫でられているような、そんな気がするのは、この盆提灯の不思議な明かりのせいだろうか。

　母の持つ線香花火の火が行き尽くし、ぽたりと落ちると、なぜか私の頬に涙が伝った。

＜終＞